初期同志社の岸和田伝道の初穂

―同志社女学校第一回卒業生、山岡登茂と田代初の場合―

坂本清音

はじめに

同志社と岸和田との繋がりの第一歩は、言うまでもなく、岸和田の元大名岡部長職が在米中に新島襄にあてた書簡（Springfield Mass., U. S. A., 1878. 5. 7）に始まる。

岡部長職（一八五四―一九二五）は、明治元（一八六八）年に就任した最後の岸和田藩主であったが、明治四（一八七一）年の廃藩置県により東京へ移り、さらに四年後（明治八年）には、留学のため渡米（当初五年の予定であったが、結局 Yale 大学と Cambridge 大学で八年学び、明治十六年帰国）。先に渡米して、マサチューセッツ州スプリングフィールドに住んでいた叔父（母冬青の実弟鳥居忠文）―フィリップス・アカデミーとアーモスト大学で学ぶ―を通して、キリスト教に出会うことになる。

岡部は、さらに当地でドワイド・ムーディの説教に心を打たれて、明治十一（一八七八）年春にはスプリング・フィールドの the First Congregational Church で受洗し、その教会の会員となった。最初はすぐにでも帰国して旧藩士への伝道を企てたが、現地の友人の忠告により、帰国は修学後のこととして、とりあえず新島に書簡

を送って、岸和田伝道を依頼したのである。

以後、キリシタンの時代はさておき、これまでキリスト教との関わりが皆無であった明治初期の地方の都市に、藩主の一通の書簡が起因となってプロテスタントの伝道が進展して行く。それに伴って、当地の青年男女がキリスト教を学ぶために同志社の生徒となり、同志社からの応援を得、かつ自分たちの働きで、岸和田のキリスト教伝道を活性化させていく過程は、大変興味深いテーマである。

先行研究としては、萩原俊彦による入念な岸和田研究があるが[1]、それらは、山岡尹方（一家）と山岡邦三郎・春夫妻が中心となっている。小論では、萩原論考では十分に触れられていない同志社女学校関係者―主として、岸和田出身の第一回卒業生二人、山岡登茂と田代初―の動向を辿ることにより、山岡姉妹が岸和田伝道に果たした役割を含めて、二人に与えた同志社女学校のキリスト教女子教育の成果を検証したい。

先ずは背景となる明治十年代の、プロテスタントキリスト教による岸和田伝道の状況を、萩原論文および『岸和田教会百年史』と『岸和田市史』第四巻、および『熊沢友雄日記』を参考にまとめておく。

Ⅰ　明治初期の泉州岸和田伝道の景況

―伝道開始の明治十一年から岸和田教会創立の明治十八（一八八五）年まで―

一．隆盛期（明治十一年～十二年）

新島の許に岡部長職から伝道依頼の手紙が届いたのは、明治十一年六月か七月（発信は五月七日）のことであった。「二～三人の熱心な働き手」を岸和田伝道に送り出して欲しいとの依頼であったが、手紙が届いた時期には英学校の生徒はそれぞれの伝道地に出かけてしまっていたので、新島自身が岸和田に出向くことになった（七

月二十日～二十八日）。岸和田では、同じく旧藩主岡部長職からの書簡を受け取っていた山岡尹方と宮崎八郎平らが待機しており、新島はその日から岸和田物産会社を会場に七日間連続で説教を行った。聴衆は日を追うごとに二十人から四十人、さらに一〇〇人へと増えて行ったが、何日たっても聴衆が全て男性であることに新島は驚いた。そこで「私は男子の皆さんに対してと同様、女子の皆さんにも福音を説きたいのです」との希望を述べ、その結果、最後の二晩（二十六・二十七日）は、女性のための特別集会が持たれた。そこでも各回百名を超える聴衆があった（『新島襄全集』六、一九一頁）。

その後を、福知山伝道から帰ったばかりの山崎為徳が引き継ぎ（八月三日京都出発）、約一カ月滞在してヨハネ伝の講義をした。その折には、日曜から木曜は男性対象、金曜は「女集まりの説教日」（『七一雑報』明治十一年九月十三日）が定着していた。会場も物産会社から時習社[2]へと移り、同志社から海水浴を兼ねて来ていた「岸和田キャンプ」の連中も参加し、大久保（真次郎）や上原（方立）らも加わってキリスト教の演説会をした。そして、八月三十一日に山崎が帰京して一週間も経たない九月六日には、岸和田から七名の生徒（そのうち一人は女子[3]）が同志社で学ぶために来るという信仰の盛り上がりであった。旧藩主の後押しがあったとはいえ、新島が伝道に赴いて一カ月半という猛スピードであった。この件に関しては、岡部長職からもその年の九月二十八日付で、早々と新島に礼状が届いているが、その中で、

又ご滞留中、婦女へも別段御説教被下候由、右等万縷残る処なくご注意にて、泉友の幸福は申すに及ばず、小生に於ても幸甚之至に御座候、（『新島襄全集』九上、八十八頁）

と、とりわけ婦女子への伝道を感謝しているのは、岡部も留学して初めて、日本女性に対する不当な扱いに気づいて心を痛めていたためであろう。

さらに十月二十八日、地理的にも近い大阪の沢山保羅や宣教師デフォレスト、女性宣教師グールディが伝道に出かけ、男女三百余人が集まった。十一月五日には、沢山は新婚の妻たかを同伴し、彼女は女性たちに聖書の説明、讃美歌指導を行った。

その年十二月二日には、グールディと新島八重が伝道のために岸和田を訪れた。

（前略）万事懇ろに周旋され又集の手筈もしてありしと見へ直様（すぐさま）十二三人の処女来たりしかば夫より讃美歌を教しが始にて追々男児も集まる様になり午前も午後も讃美歌をおしへ其夜は自由社（ママ）にて説教されたり又土地の風俗と見へ男女席を一ツにせず婦人は説教に聴聞に来も衾（ふすま）の影に坐り、顔を顕はさざりしが此度は女教師の事ゆえ始て衾を取はずし顔を見せし由。（『七一雑報』明治十一年十二月二十日）（傍点坂本）

と、女性による女性対象の伝道ならではの効果を報告している。さらに翌日、沢山が説教した時には、「聴聞人は常に倍して凡そ七百人も集りさしも広き演説館も立錐の地なきに至れりと」（同上）という大盛況であった。その後も、大阪からは定期的に伝道が行われた。

二．迫害期（明治十三年）

上記のような景況を受けて、翌明治十二（一八七九）年六月に同志社神学校第一回の卒業生となった下村孝太郎が伝道師として着任し、岸和田の近況を「近頃は聴衆おほき時は三十人位よろこばしき事は毎（いつ）も同じ顔を

見ることなり右の中士族多し士族も上等なり之は旧知事公の勧によりし者が一週間に二度会読あり安息日には説教或は聖書の証拠を読む」（『七一雑報』明治十二年十月十七日）と報じ、旧藩主岡部長職側近の者たちを中心にして着実にキリスト教が根付いて行く様を喜んで報告している。

そして、明治十三（一八八〇）年二月、「旧知事岡部公より教育資本として三千円を給与せられ之を以って同志社卒業生下村氏を聘し」（『七一雑報』明治十三年七月二十三日）て、「時習舎英和学校」をスタートさせ、ますます快調の筈であったが、この学校はわずか半年で閉校の憂き目をみる。萩原は、山岡尹方が堺県に提出した私塾「開設御届」、同じく、山岡による「伺書」を引証し、舎則と教則[4]をつけて開校の様子を詳述しているが、「時習舎英和学校」は「同年八月　党派起リ　反対党ノ迫害スル処トナリ　有志輩瓦解シ　又集輯スル能ハサルニ至リ　下村氏モ亦去ッテ肥後熊本ニ帰ル」（『岸和田教会百年史』二十二頁）という悲惨な状態で終わった。

旧藩士の間で、特に藩主の信頼を受けキリスト教勢力を拡張しようとしていた山岡らに対する、他の藩士たちの反発が強くなっていたのかもしれない。この頃なおキリスト教に共感を示すものたちは「山岡党」と呼ばれて異端視されたこと、尹方の三女満寿が幼少の頃、「ヤソの山岡やあい」と子供らにいじめられ、石を投げられたことなど（萩原「明治十年代」一五一―三頁）は、この時期の岸和田でのキリスト教迫害の歴史の一端を示していると言えよう。

三．復興期（明治十三年十月～十八年）

学校こそ失敗に終わったが、信仰の芽は決して潰えることはなかった。二カ月後には大阪の上代知新によって伝道が再開されたし、翌春、明治十四（一八八一）年四月には、四十歳の山岡尹方が前年開設されたばかりの、同志社の邦語速成神学科（後の別科神学科）に入学した。これは、山岡の信仰に対する本気度を表すものであり、

岸和田のキリスト教伝道にとって、前途に希望をもたらす出来事であった。同年、すでに長老派ノックス宣教師から受洗していた長男邦三郎も、東京の築地大学を中退して同志社に転校した。

その後は、逆に迫害期の試練によってキリスト教に対する求道心は一層堅固になり、「最初伝道のはじまりし頃ほど聴衆はあらざるも、当時の聴衆は人につれて来りし者、今のは、自ら求めて来るものなれば、虚実其位を異にすること大なり」（『岸和田教会百年史』二十六頁）と、自発的な求道と伝道の両活動が再燃してきた様子を記録している。その結果、島之内教会[5]での山岡尹方の受洗（明治十五年九月十日　ジョン・ギューリック宣教師より）に次いで、明治十六（一八八三）年七月二十八日には、同じく島之内教会で六名（尹方の妻左居を含む）が宮川経輝牧師より受洗、翌年六月十日には、九名が上原方立仮牧師より受洗するなど[6]、続々と岸和田出身のクリスチャンが増えて行った。そして同日、上原仮牧師の按手礼が島之内教会で行われるという順調な出だしであったのだが、後出するように、明治十七（一八八四）年九月に山岡登茂と結婚したばかりの上原は、新婚生活約二十日後の十月十五日に腸チフスに罹って急逝する。そのような中で、同志社から岸和田へ派遣される仮牧師たちは短期間で交替しつつも、上原→松尾敬吾→片桐清吉と続き、いよいよ明治十八年にはそれまで島之内教会の岸和田講義所だったものが、独立して岸和田基督教会となる（九月十七日）。初代牧師は、宮川経輝牧師の斡旋で西宮教会から戸川安宅（やすいえ）牧師が着任し、会員二十名（内訳は、母教会島之内教会からの転籍十五名、当日受洗者三名に、戸川牧師夫妻）でのスタートであった。

萩原論文でも指摘されている如く、明治初期岸和田でのキリスト教の受容は、封建時代以降の藩主の権勢下にあった上級士族を受け皿として成功したパターンであった。

Ⅱ　岸和田から同志社女学校へ来た生徒たち

一．女生徒の出自―岸和田藩士の重鎮、山岡家と田代家

岸和田からの同志社女学校生第一号となったのは、明治十一年九月六日に初めて京都にやってきた七名の生徒の内の一人、山岡登茂であった。彼女は山岡尹方と左居（兄邦三郎の母、於右左の妹で、姉没後、尹方と再婚）の間の第一子で、長女である。他に妹二人（京と満寿）がいて、次女の京も姉の後を追ってすぐに同志社女学校に入学した。

山岡尹方（一八四〇―一九一五）は岸和田藩士田中文右衛門の次男で、山岡尹達の養子となり、岸和田藩大参事、堺県権典事などを歴任。熊沢友雄の従兄弟に当たる。熊沢と共に時習社の運営にあたった実業家。明治十一年、国立五十一銀行の創立に関わり、また、明治二十（一八八七）年第一煉瓦製造会社を設立して初代社長に就任するなど、郷土の近代産業の育成にも尽力した。藩主岡部長職の命を受けて、岸和田へのキリスト教受容に最も熱心な一人であった。前述の通り、四十歳で同志社邦語神学科に入学し、明治十五年には岸和田で最初のクリスチャンとなり、七十五歳で没するまで模範的なクリスチャン・ファミリーの礎を築いた。

『岸和田教会百年史』（二十九頁）の記述に、築地大学を中退して同志社に転校していた尹方の長男、

> 山岡邦三郎は、［明治十五年］七月　同志社が夏季休暇になると、三日（月）午前六時十分の汽車[7]で、京都を発ち、その日正午、岸和田に着いた。（中略）今度は、同志社女学校在学の少女五名、すなわち妹の登茂と京、田代がふたり、ほかに黒川を連れてもどってきた。

とある通り、明治十五（一八八二）年七月には山岡家の姉妹だけでなく、田代環の娘二人、初とつぎ、そして黒川某の五名が女学校に在学していたことが分かる。ただし、同年六月には、山岡登茂と田代初は同志社女学校第一回卒業生となっており、もう一年英書科で学ぶ田代初はともかく、山岡登茂にとって、今回は女学生として最後の帰省となったに違いない。

「田代がふたり」の父、田代環（一八三六―一九一四）も岸和田藩士の重鎮であった。彼は旧豊橋藩士石井鶴翁の四男で、幼名を金四郎といった。元治元（一八六四）年、岸和田藩士田代家の養子となり、四年後の明治元年、家督を継いで環と改めた。『岸和田志』には「性剛直事ニ臨ミテ能ク断ズ、又武事ニ長ジ体躯鉄ノ如シ」（四一八頁）と評されているが、岸和田公議人・大参事で集議院の議員などの要職に就き、藩政の改革に力を発揮した。明治三（一八七〇）年七月に廃藩となると堺県に出て出仕し、明治十一年には国立五十一銀行の創立に関わり取締役となった。明治十五年北海道集治監副典獄に任じられるが、十九（一八八六）年には職を辞して郷里に帰省した。明治二十五年には岸和田紡績会社の創業にも関わった。田代環も若いころは、時習社の集まりによく顔を出していた。晩年は謡曲俳句などに親しみ、悠々自適の余生を楽しんだ。

二．スタークウェザー書簡の中の「岸和田の少女たち」

A・J・スタークウェザーは同志社女学校初代の女性宣教師であり、明治九（一八七六）年から十六年まで同志社女学校「校長」[8]としての責任を担った。登茂と初は、在学期間中ずっとスタークウェザーから寮生活を通して、キリスト教の価値観を学び、讃美歌も日・英語で上手に歌えるようになっていた。

宣教師たちは本国で支援活動をしてくれている団体（の代表者）にしばしば手紙を書いて、「京都ホーム」―同志社女学校は、宣教師文書の中では、しばしば「京都ホーム」と呼ばれる―の様子を知らせていた。以下に、「岸

和田の少女たち」が登場する書簡を、『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（1876年―1893年）―アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして―』上巻（同志社女子大学史料室叢書Ⅱ　二〇一〇年）から引用する。

①アレン夫人宛　1878・12・20（C―33～36）

女学校で一番年下の十一歳の少女［山岡京］が故郷の両親と祖母宛に「早くイエス様を信仰してください」と手紙を書き、グールディと新島夫人が彼女の故郷へ行った時に聞いていた話を、繰り返し伝えました。家族の人たちは少女の話を熱心に聞き、大いに心を動かされました。

②ミス・チャイルド宛　1879・1・6（C―36～37）

今しがたカランカランと下駄の音と共に「ただ今」という楽しそうな声が聞こえて、二人の少女が岸和田から帰寮して来たのが分かります。岸和田は若い大名、岡部さんの故郷で、彼の要請を受けて新島氏が伝道に出かけ大勢の聴衆を集めた場所です。新島夫人とグールディも、最近、岸和田伝道に出かけたことはお聞き及びのことでしょう。

③ウーマンズ・ボードの友人宛　1879・3・18（C―42～45）

新島夫人は今日の午前中に、二人の少女を連れて、彼女たちの郷里、岸和田へ行かれました。（中略）そこでは、夏休み以来、二週間ごとに説教が行われています。

④ウーマンズ・ボードの友人宛　1879・4・5（C―45～50）

新島夫人は、休暇になったので帰郷する女生徒二人に付き添って、岸和田に行かれました。（中略）夫人は当地の人々に説明したり話しかけたりするのに、二人の少女が助けになると大変喜んでおられま

した。二人は讃美歌を歌うときには本当に役立ちます。この二人は去年の九月に入学したのですが、とても嬉しいことには、彼女たちがここ京都でも歌うのが大好きな「世の光なるイエス」や「イエスの許に来なさい」などの英語の讃美歌を現地で歌いました。二人の内の一人［山岡京］は僅か十歳で、身体つきも小さく華奢ですが、心の中には神様への愛がしっかりと根付いており、その愛の力で生来のはにかみ癖を乗り越えてキリストのために働いています。帰寮に際し、二人の新入生［田代初とつぎ、または黒川某?］を連れて戻って来ました。

以上の書簡から、岸和田の女生徒たちが帰郷した折には、グールディや新島八重の伝道の手助けをしていたことが分かる。なお八重はこの時期の関わりを通して、晩年まで山岡家とは親交があった。大正六（一九一七）年一月二十一日に岸和田教会で「新島先生ノ記念日」の説教会があった時には、八重は牧野虎次に同行して山岡家に宿泊、翌日、泉南高等女学校で講演をしている。

Ⅲ　「岸和田の少女たち」が同志社女学校で得たもの

一．創設期の「京都ホーム」に在籍していた女生徒たち

「京都ホーム」が柳原前光邸でスタートしたのは、明治九年十月二十四日であったが、第一回の卒業式を挙行出来たのは、それから六年後の明治十五年のことであった。その間、スタークウェザーの書簡には、伊勢から来た本間重慶の許婚本間春や大西静子、熊本洋学校で学んだ伊勢宮・徳富初、および下村孝太郎の姉妹下村ちき・すえ、市内からは山本覚馬の長女峰・高松仙等々二十名を超える生徒名が折々に紹介されるが、上記生徒の内、

高松仙を除いて全てが女学校を中退している。そのような中で、入学の時期は比較的遅かった岸和田出身の山岡登茂（明治十一年）と田代初（明治十二年）が、第一回卒業生五名の中に入っていることは特記に値する。その登茂が妹と共に、学校の休みには岸和田に戻って伝道の手助けをしていたことは、スタークウェザーの書簡で紹介したが、では彼女たちは学校でどんなキリスト教教育を受けたのであろうか。

二．当時の同志社女学校のキリスト教教育

この時期の学校生活の日常の記録がリアルタイムで残されているのは、当時「京都ホーム」のキリスト教女子教育の責任者であったスタークウェザーを始め女性宣教師たちが本国に送った報告書の中である（前掲書参照）。ここでは、当時の宣教師が日本の女性には、次のようなキリスト教訓練が必要と考えた項目が挙げられている。（*Life and Light for Woman* １８８２年３月号『前掲書』Ｌ―１０７）

・親切で円満な女性らしい性格を養い育てること
・身体を大切に扱うこと
・うそをつく習慣を止めることを教え
・本当の意味での謙遜を身につけ
・自分の考えを持って行動するように導くこと
・女性の影響力がどれほど大きいかを示して、自ら慷慨心を持ち、自らの人生を神から与えられた賜物・特権として積極的に生きるよう訓練すること

特に最後の二項目は、当時、日本女性の規範とされていた儒教的な生き方、すなわち「三従の教え」に縛られて卑屈な生活を強いられていた女性たちには新鮮であっただろう。女生徒たちはこのような訓練を通して、確かに自分の生き方に自信を持ち積極的に生きる道の可能性を視野に入れることができ始めたに違いない。しかも、その訓練を、寮生活の中で、頭だけでなく身体を通して受け、自分のものにすることができたとき、同志社女学校で学んだ女生徒たちの生き方は根本から変えられた筈である。

スタークウェザーによる「京都ホーム」の年間報告書（明治十四年五月）の中には、生徒たちがハナ・モア[9]やメリー・ライオン[10]を理想として、他人のために働くという気持ちと熱心さを体得しつつあること、マウント・ホリヨーク方式を取り入れて、生徒には全員に毎日の家事分担を義務付けていること、そのために一人の教師は毎日一時間、もう一人の教師は給費生を監督するために毎日二時間余計に働いていることなどが記述されている。

三．当時の学科編成

二人の卒業する二年前の明治十三年度は、来日三年後に、やっと京都に居住許可の下りたF・パーミリーが加わって、創立以来孤軍奮闘を強いられていたスタークウェザーと、日本人教師宮川経輝、加藤勇次郎を含めて、初めて女学校が四人体制での運営が可能となり、生徒数も三十三名を数えた女学校第一期隆盛期でもあった。

当時の同志社女学校の学則を見てみよう。女学校最初の学則は、明治十二年六月に英学校第一回卒業生（十五名全員が熊本バンド）の宮川経輝（卒業式の演説題が「女子教育論」）が女学校に就任したことにより急速に整備され、翌十三年六月の「広告」には、学科課程表が初めて公表された（『同志社百年史』資料編一　三一三―六頁）。修業年限が邦語科は三年、英書科は四年のコースであった。

しかも、スタークウェザーが本国に報告した明治十三年度の日課表によると、福音書・黙示録・使徒書簡などが毎日学ばれており、新島の奨励が週に一回あったこと、放課後には、スタークウェザーによるオルガン・レッスンとパーミリーによる体操が毎日、講義所での伝道のための教案作りが週に一度の割合で実施されている。(Annual Report of Kioto Girls' School, May 1881)

二人とも、先ず第一期生として邦語科を卒業するのであるが、卒業時には全員がエッセイを書いて発表することになっていた。山岡登茂の書いた卒業エッセイ「責任」は、好運なことに現物が残っている（後出）が、田代初の「人間最上乃目的」は残存していない。(11)

前述の通り、田代初の入学は、山岡家の登茂・京姉妹が同志社女学校で学び始めて一年後の明治十二年、ちょうど宮川経輝が女学校に就任し、学制が整備された年であった。初は、登茂より遅く入学して、同時に第一期生として卒業したのだから、創立時からいた生徒全員を含めて在学年間は一番短くて卒業したことになる。しかも初は、五名の一期生の中から、高松仙と二人だけもう一年学んで、第二期生として英書科も卒業している。

初は、それだけでなく、別稿で扱う学内奨励のまとめ「話之覚」を残しているが、それらのことからも彼女の勉強意欲の高さが窺われる。なお初も登茂も邦語科を卒業時には、すでに第一公会で洗礼を受けていた。(12)

Ⅳ　卒業後の山岡登茂と田代初

一．山岡登茂の場合

〈最初の結婚〉

山岡登茂は明治十五年六月に同志社女学校を卒業した後、岸和田に戻っていた。そして、その前後から岸和田伝

道に関係の深かった上原方立仮牧師（二十四歳）と登茂（十九歳）の縁談が纏まり、さらにお目出度いことに、島之内教会では上原方立仮牧師の按手礼が執行されて明治十七年六月十日に当教会の初代牧師となった。そして、三カ月後の九月には、山岡登茂と結婚式挙行というおめでた続きだったが、新婚生活一カ月も満たない十月十五日、泉州および河内の伝道旅行中に、方立は腸チフスに感染し、病臥数日で他界した。余りにも痛ましい早死に、新島襄は登茂に歌を添えてお悔やみ状を送っている[13]（『新島襄全集』三、三二四―五頁）。

新島襄が上原ともにあてたお悔やみ状 草稿
（新島遺品庫 下 100）

上原は肥後八代の生まれで、熊本バンドの一人であったが、信仰堅固、「同志社随一の大雄弁家（中略）、二十貫大の体をゆたかに揺り、長い手を盛んに動かし、滔々と満腔の熱血を吐き出すと、満場閲寂、忽ちに魅せられて了ひ」（『同志社ローマンス』一四五―六頁）と評されるほど弁舌に長じており、かつ、愛情深い人であった。

非常に短期間ではあったが、牧師夫人としての道を歩んだ登茂は、夫との突然の不遇な離別の悲しみを乗り超えて、明治十八年から二十五年の七年間、自活の道を選んだ。最初は岡山県高梁の順正女学校で、英語・音楽を教え（高梁では初めてのオルガン奏者であった）、校外では男子や自分より年上の人（綱島梁川もいた）に英語を教えるなどした。その後は大阪の梅花女学校で教鞭をとった。

〈二度目の結婚〉

二度目に彼女が選んだのも、牧師夫人の道であった。夫となったのは原忠美牧師。岡山出身、父を七歳で亡くし、明治十四年三月、母友子はO・ケリー宣教師らに導かれて岡山組合教会で受洗したが、忠美は同志社英学校に入学してから、明治十五年二月新島襄によって同志社教会で受洗。英学校を卒業後、神学校に進学。一八八八年六月英語神学科を卒業してからは、最晩年に新島が最も力を入れていた新潟伝道に赴き、新発田教会に赴任していた。（新島が大磯で療養中に最後の力を振り絞って書いた明治二十三（一八九〇）年一月十七日付の書簡二通は、それぞれ新潟にいる原忠美と長岡教会の時岡恵吉宛である）。

登茂が忠美と結婚したのは、彼が新潟に派遣されて四年目の明治二十五（一八九二）年四月四日、大阪教会においてであった。二人共に二十七歳で、登茂の方が半年姉さん女房であった。新潟は仏教の盛んなところで、原夫妻は様々な迫害を受けた上に、新発田に居る間に忠美の母と第一子（生後四十日）を失った。さらに忠美は七年に及ぶ新潟の寒気のため健康を害し、ついに明治二十八（一八九五）年明石組合教会に転任した。

明石教会に移ってすぐ、明治二十八年十月十日に按手礼を受け、正牧師として牧会に励んでいたが、三年も経たない内に肺患に掛かり、教会の強い慰留も断って明治三十二（一八九九）年末には退職した。従って、その年から明治四十（一九〇七）年原の召天までの八年間は無収入で、登茂は看病の傍ら英語を教え、親戚等の援助を受けて暮らしたが、生活費の半分も得られなかったという。しかし夫妻は①財政が苦しいときにも決して人には訴えない。ただ神にのみ訴えること。②決して借金をしない。もし物がなくなって食べることができなくなったら、親子五人餓死しよう。その時は神が死ねと言っておられるのだから、それに従う、と決めて、神に委ねる毎日を送った。聖書の「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのもの

はみな加えて与えられる」（マタイ六・三十三）のみ言葉を信じて、命がけでそれを信頼していったら、そのみ言葉が真実であることが証されたと、登茂は言っていたという（『神人合一』二一一頁、『平凡な二世牧師』七―八頁）。結核の夫の看病に加えて、病気を子供にうつしてはならないという用心と覚悟はさぞかし大変なものだったろう。登茂の母親としての底力と揺るがない信仰の証である。

〈夫の死後―息子原忠雄牧師と共に―〉

明治四十年十月十四日夫忠美が享年四十二歳でこの世を去って、登茂は再び寡婦となった。今度は十四歳を筆頭に二男一女がいたので、先ずは生計を立てることが急務であった。生前、忠美が神戸女子神学校で教鞭をとっていた縁もあり、明治四十一（一九〇八）年一月より、登茂は長女美栄（よしえ）を連れて神戸女子神学校に舎監として入居。二男の忠雄と三男忠明は、以前に教会で世話をしたことのある知人（小川平吉夫妻）の家で厄介になる。その年四月に忠雄は同志社普通部に入学、忠明はもう一年幼稚園時代を小川家で世話になったのち、神戸に移った。（『平凡な二世牧師』十三頁）。

その後十年間、登茂は女子神学校の舎監として生徒の指導にあたり、忠雄が同志社神学校を卒業して兵庫教会に赴任するのを機に、舎監を辞して息子と同居を始める。二年後忠雄はアメリカに留学するが、その間、登茂は須磨教会で婦人伝道師として森山寅之助牧師の下で奉仕をした（『神人合一』二一七頁）。女子神学校舎監の間の経験から、牧師夫人としてだけでなく伝道師としての働きもできるようになっていたのである。

それから三年後の大正十二（一九二三）年九月に忠雄が留学から帰国し、しばらく岡山教会で働いていた間は、再び忠雄と共に岡山に移り住んだが、大正十四（一九二五）年に忠雄が結婚し、翌年四月から京都で同志社中学教師（同志社女専でも教える）として働き始めると、登茂も京都に移り、今度は母校同志社女学校大和寮で

昭和二（一九二七）年～三年、三年～七（一九三二）年までは西常盤寮で舎監として働いた。

同窓会との関係でいえば、登茂は神戸時代は同窓会神戸支部長（一九〇九―一九二一）として、京都に移ってからは京都支部員となり、かつ本部評議員（一九二七―一九三二）として、同窓会のために働いた。さらに、昭和五（一九三〇）年、忠雄が台湾に移住し台北教会牧師として働き始めると、登茂は日本と台湾を往来しながら、同窓会台北支部長（一九三三―一九四二）の任にもついた。

最晩年は忠雄が昭和十七（一九四二）年に台湾から帰国し、尼崎教会、綾部丹陽教会で牧師をしている間、太平洋戦争末期の空襲下で過酷な生活を強いられながら、登茂もいっしょに過ごした。最期は敗戦後一年も経たない食糧難の最中の昭和二十一（一九四六）年四月二日、綾部で召天した。享年八十一歳であった。

同志社女学校卒業後、登茂は二度の必ずしも順調でなかった結婚生活を経験しながらも、牧師夫人として、伝道師として、女生徒の舎監として、また、同窓会の役員として、それぞれの時期に与えられた役割を、確たる信仰に基づいて果たし、果敢に前向きに生きた。また、夫が二人とも健康上の理由で中断しなければならなかった牧師の仕事を息子へと引き継ぎ、信仰の導き手の育成という重要な役割をも果たした。

二．田代初の場合

〈眼科医小林春召との結婚〉

同志社女学校初期の、日本語による記録は、明治二十六（一八九三）年同志社女学校同窓会が発足したのを機に、翌二十七年から学校との共編で出版を開始した『同志社女学校期報』（以下『期報』と略す）が、リアルタイムで残存している唯一の記録である。『期報』第一号の時点で田代初は既に小林初になっており、住所は大

阪西堀博労町、（後に、大阪東区西横堀博労町）眼科病院長小林春召と結婚、斉家となっている。卒業後十二年も過ぎているのだから、彼女が結婚しているのは当然であろうが、結婚の年月日は分からない。

夫、小林春召に関して、明治二十年頃本郷教会で海老名弾正牧師から受洗したことは分かっているが（『本郷教会　創立五十年』八十三頁）、大阪に落ち着いてからの信仰生活は近辺の教会史を紐解いてみたが、今のところ不明である。しかし、大阪での眼科病院開業は明治二十一（一八八八）年五月六日の大阪朝日新聞朝刊に大きく広告が出ているし、明治二十七（一八九四）年の『重宝記資料集成』第四十巻一九五頁には一頁を使って病院の絵入りの広告も収められているので、当時、眼科病院長としての名声は相当知られていたに違いない。その上、「眼病養生篇　附・近視眼略論」（明治二十一年九月）、「酒の人身に於ける作用一夕問答」（明治二十一年十二月）、「近眼者の心得」（明治二十三年二月）の三冊が、何れも講演または口述集として、大阪教会の今村謙吉が印刷者となって出版されている（国立国会図書館デジタル化資料として公開）。特に二冊目の「酒の人身に於ける作用」は、当時の禁酒運動的メッセージであり、教会には属さなかったが、クリスチャンとしての生涯を送っていた証と言えるかもしれない。

小林家はその後「衛生のため」、東成郡住吉村字柿山に転居しており、『期報』二十九号（明治四十三年十二月二十六日）の近況報告では、「子供は数人出産致し候へども、三人のみ成長致し、内長女は一昨年十七歳にて死去致し只今十七歳の男子と十五歳の女子は岸和田中学校と梅花女学校に入学致し居候」と、この頃は郷里岸和田の近くの田園生活を楽しんでいる様子が伺える。なお、すでに一期生五人の内、三人が故人となり、原登茂姉と自分だけになったと寂しさを託っている。

それから六年後の『期報』三十九号（大正五年十二月十日）では、主人は医業で大阪に眼科病院を開業して

三十年になるが、八，九年前から、家族は住吉村に住んでいること、長男は洋画を研究し、次女は一昨年梅花女学校を卒業して今は家事修業中、と報告している。引っ越し当時に戻るが、南海電車玉出駅下車の小林家で同窓会大阪支部の秋季例会が行われたことが『期報』二十八号（明治四十三年四月一日）で報告されている。

（前略）讃美歌次で宮川次子姉〔宮川経輝夫人〕の祈祷を以て楽しき集は開かれぬ、小林姉の聖書朗読を終りて、正式とし直ちに親睦に移る、手入れよき野菜畑、緑滴たる如き芝生の御庭に古風な亭の立てる、ブランコの雨天にさらされたるなどを見下しながら、遠くは摂津の海を眺め得らるる見晴しよき、二階の御座敷に並べられし御馳走は、皆姉妹方の御好きの品々（中略）、一座の賑ひ寄宿舎生活にも似通ひて時の移るをも忘れしが、折に聞ゆる節面白き楽器は小林姉が御心づくしの蓄音器とぞ（後略）（三十―三十一頁）

十七歳で亡くした長女への思いからも、特に家族の健康に配慮し、物心両面で豊かな生活を送っていることが想像される報告文である。

〈同窓会大阪支部長として〉

同志社女学校同窓会は、卒業生が特別会員を含めて、やっと一〇〇人近くなった明治二十六年に組織されるのであるが、その後卒業生の数が増えるに従って、徐々に全国に支部会が結成されていく。四年後の明治三十（一八九七）年に支部会第一号として発足したのが、大阪部会（この年に大阪・東京・京都と相次いで部会が結成）であり、初は初代の支部会長に選出された。

『期報』八号（明治三十年六月二十四日）では、先月同窓会大阪部会が組織され、小林初子が会長に選出され

たこと、京都からは教頭松浦政泰と舎監三樹東子がお祝いに駆け付け、懇親会が開かれたときの様子を以下のように伝えている。

> 席上我校の太古史談も出て（中略）、驢馬乗りや、弓の運動、玻璃拭や草取りの罰則、或は高笑して教師のお目玉を戴きたる、或は窓より隣寺の坊主の働くを見たりしが為臨時警鐘鳴りて一同戒を受けたる、実に封建時代の刑法は厳しくして今の立憲制度とは同日の談にあらざりけり。互に隔なく語りて且つ笑ひ且つ戒しめ、快も多く益も多かりき。（十三頁）

卒業後数十年経ってなお、昔の寮生活をいとおしみ、学年を超えて母校を懐かしむ同志社女子部ならではの、いとも楽しそうな集いの記述である。以後初は、支部長を交替している年もあるが、大阪部会の集いには殆ど皆出席で、いつも出席者名の中に名前がある。また毎年のように、初は本部宛に年賀状を送っていたこと、同窓会費および寄附金をきちんと納入している記事が続く。

最後に現役の小林初子の消息が記されるのは、『期報』四十五号（大正九年八月五日）であり、阪神連合同窓会記事（魚崎　岡島千代子宅）の中である。大正九年五月八日に本部より松田道校長を迎えて例会を催した。折悪く母堂がご病気中で原［登茂］姉は欠席されたが、**大阪支部長の小林姉司会の下に讃美歌祈祷、また「最後に小林姉の母校及同窓生の為の切なる祈ありて会を閉」じた**（六十六―六十七頁）。閉会後はパーミリー姉の希望でピアノを弾いて遊んだり、有志は連れだって海岸に出て新鮮なる空気を呼吸しつつ今昔の話に興じたと、いつものほのぼのとした会の雰囲気を初も十分に楽しんだ様子が描かれている。

ところが、六年後の『期報』五十一号（大正十五年七月八日）の大阪支部報告では、大正十四年十月十七日に「**母校第一回の卒業生で、多年大阪支部会会長として功労甚大であった故小林初子姉の追悼会**」と大連から転任された牧野しげい姉一家の歓迎会を兼ねた秋季例会が堂島川畔堂ビル五階の中山文化研究所婦人集会室で開催されたことが報じられた。それによると、「当日万障繰合して御来臨の**故小林初子姉の御令息の懇ろな御答辞と、御母君御発病から御永眠迄の御様子や、日常の御生活に就ての細々の御話があり、実に其の寡言実行、終始一貫した信仰の御一生涯は聞く人に涙をそゝり、深い深い教訓と感銘を与へずにはおきませんでした。それから岡本姉始め二三、故人と特に御親交のあった方々の涙ながらの感話があり、故人の愛誦された三〇九番を歌ひ一先ず第一部を閉じました**」（二〇三頁）（以上　太字坂本）と、その年の大阪支部開催以前の小林初の死が報じられているが、正確な日時は不明である。

山岡登茂の生年月日を参照して初の年齢を推し量ると、亡くなったのは六十歳前後だっただろうか。登茂のように、牧師夫人としてのキリスト教の関わりではなかったが、家庭の中で、また同窓会支部長として奉仕する中で「終始一貫した信仰」生活を守り、その感化を家族や同窓生に及ぼしたのが、初の生涯であった。

おわりに

小論では、岸和田藩主岡部長職と新島襄との奇しき縁で始まった明治初期の岸和田伝道と同志社との関係を、特に女学校第一期生となった岸和田出身の山岡登茂と田代初の二人の生涯を辿ることにより、同志社女学校でのキリスト教教育が卒業後の生き方にどのような影響を及ぼしたかを検証した。

二人とも結婚して子供数人を生みながら、その半数近くを失った点では共通しているが、牧師夫人として生

涯直接キリスト教の伝道に携わった山岡登茂と、眼科医の妻として、家庭の中で、また卒業生の集まりの中でクリスチャンとしての証をした田代初は、ある意味で対照的な生涯であった。しかし二人とも生涯母校の大先輩としての模範であり、かつ岸和田を代表する士族の娘として郷里の誇りうる先達であった。

二人のそれぞれの妹、山岡京と田代つぎは、「岸和田の少女たち」としていったんは姉と共に同志社女学校で学んだ後、結局二人共東京に出て、別の学校を卒業した。[14]

何れにしろ、明治の初めに岸和田で蒔かれたキリスト教伝道の初穂として、山岡姉妹と田代姉妹が同志社女学校で学んだこと、その内、登茂と初は、第一期卒業生として、後に続く何万人もの卒業生の魁として、信仰に基づく生涯を生き抜いた意義は大きい。

山岡登茂が卒業エッセーで書き記した「責任」を、二人ともそれぞれの方法で、立派に果たしたと言えよう。

註

（1）萩原俊彦「明治十年代　泉州岸和田における　プロテスタント伝道と　士族信徒　山岡尹方について（一）」『澤山保羅研究』三梅花学園　一九七〇年

〃　「明治期のプロテスタント伝道―特に岸和田における山岡尹方の貢献について―」（『史朋』九・十号　一九七四・七五年）

（2）時習社とは、廃藩置県後の岸和田藩士族たちが、新しい時代の中で生きて行くのに必要な知識や情報の収集のために起こした研究会のようなもので、初めは「話会」（明治九年四月二十一日）、翌年一月からは「研究会」または「研究集会」と呼ばれていた。しかし、同年七月には、研究会の社則を決め、かつ会の名称を旧主岡部長職の館邸号から「時習社」と名付けた。開業式では熊沢・山岡ら旧藩士中心の結社であったが、四民の別なく有志者は入社できた。時習社では、研究会の時も含めて、月に一～二回の割で演説会を開催した。演説会の内容はいわゆる自由民権運動的なものと考えられ、岸和田における民権結社であったと言える。この時習社が、キリスト教の受け皿としての役割を果たして行く。（以上、『熊沢友雄日記』（一）～（四）

岸和田市教育委員会　二〇〇八―二〇一一参照）

（3）七名全員の名前は確定できないようであるが、男子の一人は山岡尹方の甥田中兎毛、女子は山岡ともであった（萩原「明治十年代…」一四五頁）。

（4）『同志社百年史』資料編一　八三「同志社英学校校則並教則稿」（二八二～三頁）として収録されている校則・教則は、実は、岸和田の「時習舎英和学校舎則並教則稿」の疑いが濃厚である。

理由①　手書き資料の用紙は、第五一国立銀行用箋である

②　教則第一期から第五期まで英学と皇漢学との二本立てであり、明治十三年三月十八日に堺県に提出された時習舎の「私塾開設御届」に記されている舎則と教則（萩原「明治前期」六十八―七十一頁）に酷似している

③　英学の科目に同志社英学校との重なりはあるが、下村孝太郎が時習舎英学部門の責任者であったことを考えると、同志社英学校との共通性は当然ありうる

④　新島から山岡尹方宛書簡（明治十三年四月十二日付）の中に、「先日者貴書並御校則御遣被下、難有奉存候、（中略）右御校之義ハ実ニ大見事ト奉祝賀候、」（『新島襄と山岡家の人々』岸和田市立郷土資料館図録　二〇〇一年）とあるので、何らかの形で、山岡尹方から「時習舎」の校則が新島に送られたことは確実である。

（5）「この頃、大阪周辺に居住する者は、それぞれの地方の体勢が整うまで、大阪市中の教会に出むいて、洗礼を受けることになっていた。伊勢方面の志願者は天満教会で、郡山方面の人は、浪華教会で、堺、岸和田などの泉州の者は、島ノ内教会において受洗するよう、区分されていた」（『岸和田教会百年史』三十―三十一頁）

（6）日付、受洗者数などは『岸和田教会百年史』の「年表」（六六五頁）でなく、「会員一覧表」（八一七頁）を参照した。

（7）関西における鉄道敷設は、明治七（一八七四）年五月開港場路線として、大阪―神戸間が開業し、さらに三年後、明治十年二月、京都―大阪―神戸間が開通した。明治十一年九月三十一日に、山崎為徳が岸和田伝道を終えて、京都の同志社に帰る際には、朝、岸和田を人力車で出発、大阪から鉄道に乗り、その日の午後帰京している（『岸和田教会百年史』一〇八頁）。岸和田―大阪間を馬車利用のケースもあった（一〇九―一一〇頁）。

（8）同志社女学校の正式な校長は新島襄であるが、宣教師文書の中で「京都ホーム」の教育および経営の責任者は女性宣教師と位置づけられ、〝principal〟または〝head〟と記述されているので、カッコ付きで「校長」と表記した。

(9) Hanna More（1745―1833）18―19世紀イギリスの著名な女子教育者。19世紀アメリカの女子教育に大きな影響を与えた。彼女の教育論の中心は、徹底したクリスチャン女性のトレーニングで、奢侈を戒め世俗的な生き方を慎み、堅実なクリスチャンになることを奨めた。

(10) Mary Lyon（1797―1849）アメリカで最初の女子教員養成のための学校、Mount Holyoke Seminary の創設者。セミナリーでは、全寮制を取り入れて徹底したキリスト教教育を行い、アメリカ中で最も多くの女性宣教師を海外に送り出した。

(11) 第一回卒業生五名のうち、山岡登茂以外に、河辺外居のエッセー「生命之進路」も残っている。

(12) 京都第一公会の名簿によると、明治十三年三月八日受洗者として七名の女性の名前が挙げられている。その内京都ホーム関係の生徒名は「山岡供、本間春、田代初、土田常、川辺外居」（漢字は名簿記載のママ）である。

(13) 「咲初て末夕日も経さる山桜　けさの嵐に散り果ぬとは」新島襄

(14) 二人の妹で、同志社女学校を中退した山岡京と田代つぎについて、今回、青山学院資料室のご協力により、その後の消息が判明した。先ず、「青山女学院」になるまでの校名の変遷を辿ると、明治七（一八七四）年　女子小学校、明治八（一八七五）年　救世学校、明治十（一八七七）年　海岸女学校、明治二十一（一八八八）年　東京英和女学校、明治二十八（一八九五）年　青山女学院である。

田代つぎは「海岸女学校」を明治十九（一八八六）年五月に卒業。「仲間の一人おつぎさん、田代つぎは一八八七年三月十日十八歳で永眠した。つぎは、京都組合教会のミッション・スクール［同志社女学校］に学んだが、当時若い者が誰しも望んだように首都東京にあこがれ上京、一八八三年九月本校に入学、一八八六年五月英学科卒業後、日本学科上級に在学し、今年（一八八七年）五月卒業予定であった。回心して受洗し、毎朝学校のバイブル・クラスを教え、また、三田の日曜学校の有能な助手であった。肺結核の発見がおくれたため、父親が大阪から上京し、つぎを熱海に転地療養させようとしたが、それも空しく急逝した。遺骸は学校に帰り多くの友に囲まれつつ、本田牧師、ソーパー師によりキリスト教の葬儀を営み、青山墓地に葬られた。―ワトソンの手記による―」（青山さゆり会編『青山女学院史』一九七三年　五十頁）

山岡京は「東京英和女学校」を明治二十三（一八九〇）年六月に卒業（第一回卒業生）。卒業後、郷里に戻って梅花女学校で教鞭をとっていたが、明治三十（一八九七）年十月十九日、加藤勇次郎（熊本バンドで同志社英学校第一回卒業生の一人。

明治十二年―十五年同志社女学校の教諭となり、主として理数科目を教える）と結婚。加藤は一八九〇年同志社校友会創設時の初代会長。後、マサチューセッツ工科大学に留学、帰国後短期間、ハリス理化学校物理学教授を勤めた。結婚当時は京都市水利事務所長で、二人は京都市新烏丸上切通東入るに住み、京は同志社同窓会京都部会長を勤めた。一九〇八年東洋商会経営の夫について門司市に移り、「二人の子供の教育に専らつとめ、教会に行く以外は殆ど交際を」せず、「紡績紬で類のない反物を織る（中略）職人」のような生活で、あちこちより注文が多く多忙であるが、「信者の名に疵をつけない様につとめて居ます」と近況の報告をしている（『青山女学院校友会会報』十六　大正三年五月）。

参考文献

相澤正彦『岸和田志』和泉刊行会　昭和六年十月

『岸和田教会百年史』日本基督教団岸和田教会　一九九三年

『熊沢友雄日記』（一）～（四）岸和田市教育委員会　二〇〇八―二〇一一年

『岸和田市史』第四巻　近代編　平成十七年三月　岸和田市史編さん委員会

岸和田市立郷土資料館秋季特別展図録『新島襄と山岡家の人々』　平成十三年十月

『本郷教会創立五十年』日本組合本郷基督教会　昭和十一年

芹野與太郎『浪花基督教会略史』　昭和三年

野々村純平『日本基督教団大阪教会九十年史』昭和四十年

『島之内教会百年史』一九八六年

長友千代治編『重宝記資料集成』四十巻　臨川書店　二〇〇七年

国立国会図書館デジタル化資料

「近眼者の心得」　http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/836308

「眼病養生篇 附・近視眼略論」http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/836304

「酒の人身に於ける作用 一夕問答」http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/836899

高橋虔『宮川経輝』比叡書房　昭和三十二年

原　忠美『神人合一』明治三十九年（昭和五十四年翻刻）
原　忠雄『平凡な二世牧師の記録―原　忠雄の自伝―』昭和五十一年
本井康博『近代新潟におけるプロテスタント』日本キリスト教団新潟教会創立百二十年記念　思文閣　二〇〇六年
『青山女学院史』青山さゆり会　昭和四十八年
松浦政泰『同志社ローマンス』大正七年
『新島襄全集』三・六・九巻
『同志社百年史』資料編一
『七一雑報』
（明治十一年七月二十六日・八月九日・九月十三日・九月二十日・十一月八日・十一月十五日・十二月二十日・明治十二年十月十七日・明治十三年七月二十三日・明治十四年九月二日・明治十五年四月十四日）
『同志社女学校期報』一・八・二十八・二十九・三十九・四十五・五十一号
萩原俊彦「明治十年代　泉州岸和田における　プロテスタント伝道と　士族信徒　山岡尹方について（一）」『澤山保羅研究』三　梅花学園　一九七〇年
萩原俊彦「明治前期プロテスタント伝道―特に岸和田における山岡尹方の貢献について―」『史朋』九・十号（一九七四・一九七五年）
坂本清音編著『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（一八七六年―一八九三年）―アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして―』上巻　同志社女子大学史料室叢書Ⅱ　二〇一〇年

〈謝辞〉

本論および山岡家・原家関係系図作成に当たり、梅花学園長原忠和氏に多くの資料提供を頂きました。謹んで御礼申し上げます。

［付記］

Ⅰ　山岡家・原家関係系図（上半部は岸和田市立郷土資料館編『新島襄と山岡家の人々』六十頁を参照して作成）

Ⅱ．登茂の果たした「責任」

一．山岡登茂の卒業エッセー「責任」

初期の女学校生が全員卒業式に読むことになっていたエッセーの中で、好運なことに山岡登茂のエッセー「責任」の原本が新島遺品庫に保存されている。彼女の考えた「責任」とは、どのような内容であったか、彼女の生きた時代の中で、それはどのような形で遂行されたかを調べることにより、登茂が同志社女学校で得たものの成果を検証してみたい。「責任」の要旨は以下の通りである。

そもそも責任には二種類ある。一つは、人に対する（直接人に尽くす）責任、他は、人のためにする（他人の幸福を保護増進する）責任である。今や女子も教育を受ける時代となった。幸運にも、自分は同胞女子に先んじて教育を受け、キリストの招きに従う者となった。だから、愛する同胞に教育の必要を示し、キリストの愛を尊ばしめることが、千七百有余万［当時、日本の人口は約三五〇〇万］の姉妹のために有する自分の責任である

単に自分のことだけでなく、日本の女性全体に対する、教育を受けた女性の責任について論じており、まさに、日本の女性の先頭に立って歩む人生を引き受けようとしていることが分かる。日本の女性の中でも、また同志

社女学校のなかでも、非常に早い時期にキリスト教に出会い、京都ホームという生活の場を通して、キリスト教の教えと生き方を身につけた者、すなわち「基督の招きに従うものとなった」自分の「責任」をどのような形で取ろうとしたのかに焦点を当てて、具体的に見て行きたい。

二．卒業後牧師夫人となってからの、「責任」ある生き方

登茂は、わずか数週間に終わった上原方立牧師との最初の結婚後も、すぐに岡山県高梁にある順正女学校で、その後は大阪の梅花女学校で、音楽と英語の教師として働いた。それらは同志社女学校で学ぶことにより身につけることのできた技能であったが、登茂は自らの責任として、自活の道を歩み始めたのである。その後、二度目の夫、原忠美牧師を天に送ってのち、長女を連れて十年余、神戸女子神学校の舎監として、さらに、同志社女学校の舎監としても働いた。このような形で自活しつつ、彼女が持っている影響力を周囲の女性たちに発揮する道を選ぶことにより、卒業時に感じていた人に対する責任を果たしていったと言える。

さらに、同志社女学校第一回卒業生として、生涯、同窓会の活動に積極的に参加するという形で、後に続く後輩たちに、母校に対する卒業生の責任と役割を、行動をもって表した。同窓会評議員の時代には、同窓会の催す様々な行事に参加し、卒業式当日に開かれる総会ならびに新入会員歓迎会では、毎年のように、聖書朗読・祈祷の役を務めた。これらは特に、登茂が牧師夫人としての経験を基に果たした役割であったと言える。

また、息子が長じて牧師になったときは、教会で一緒に暮らし、人に知らせず、困っている人の世話をよくした。登茂は四十歳くらいで髪の毛が白くなっており、人は夫の看病と貧苦で苦しんだ結果だろうと話していたが、母は苦しかったということを一度も息子に語ったことはなかった。そして、貧しい中でも、他の人々と

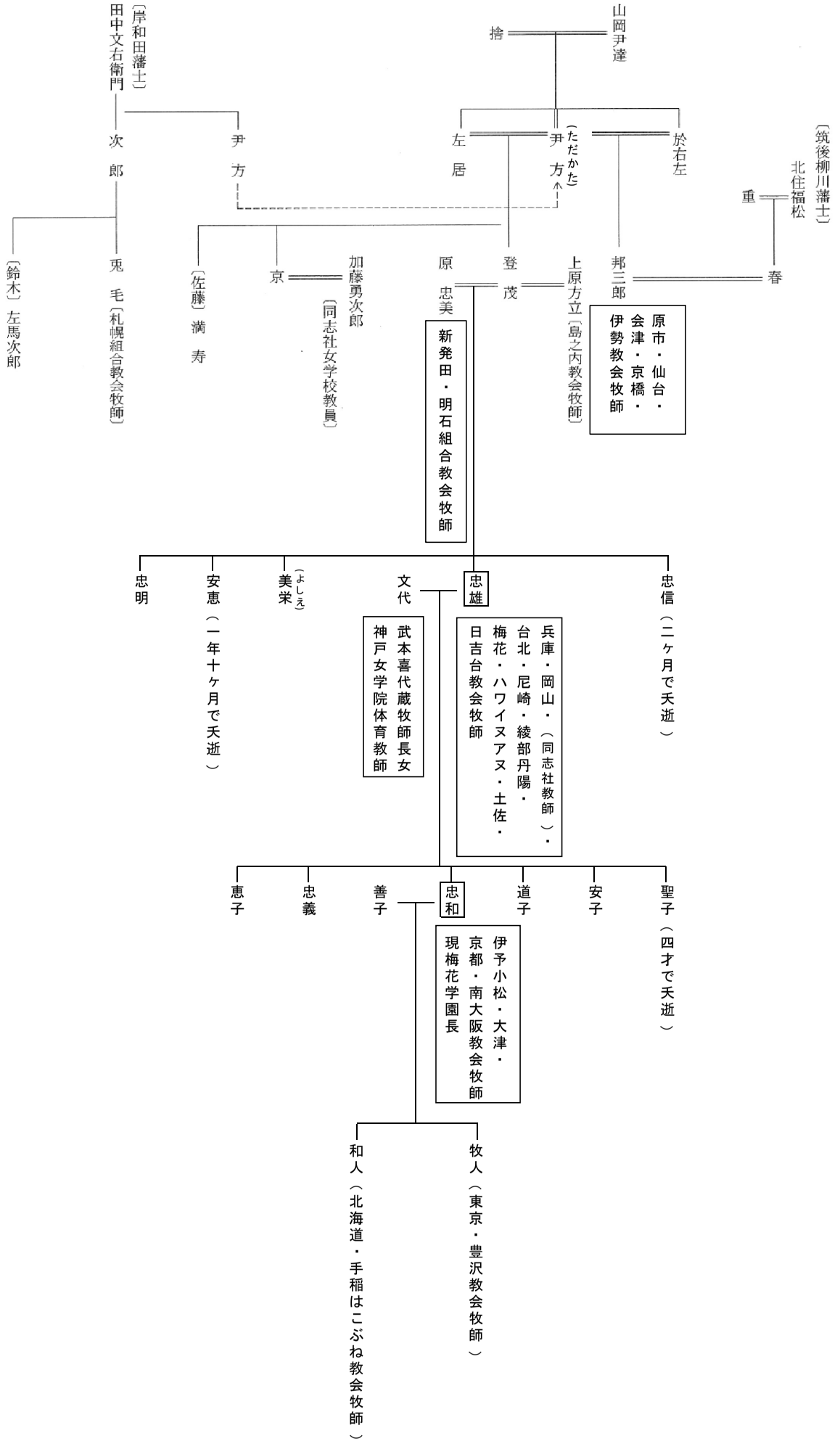
食べ物を分け合い、苦学生のためには毎月学資を送るなどしていた。

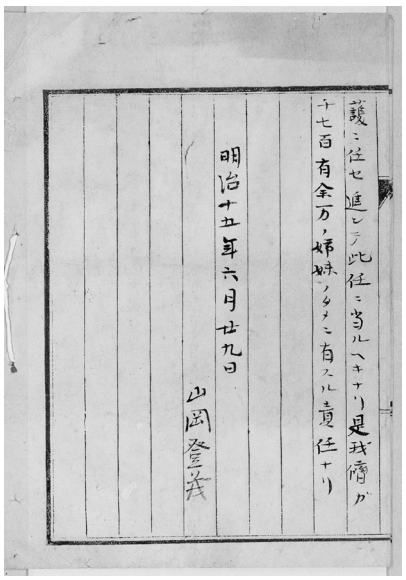
登茂の生涯を振り返って見るときに、彼女が女学校を卒業するときに抱いた、日本の女性全体に対する「責任」の思いは、日本社会という大きな舞台で、先頭に立って同胞を導くという形では実現されなかった。しかし、非常に早い時期に、同志社女学校でキリスト教教育を受け、「キリストの招きに従うもの」となった責任は、同窓会活動に参加することを通して、母校のキリスト教教育の発展のために、卒業生同士の連帯のために貢献するという形で実現されたし、牧師夫人として、夫の働きを支え、教会や学校に集まって来る一人一人の「最も小さい者」に対して、キリストによる愛を実践するという生活を通して、身近な所で、一つ一つ責任を果たしたことの意義は大きい。

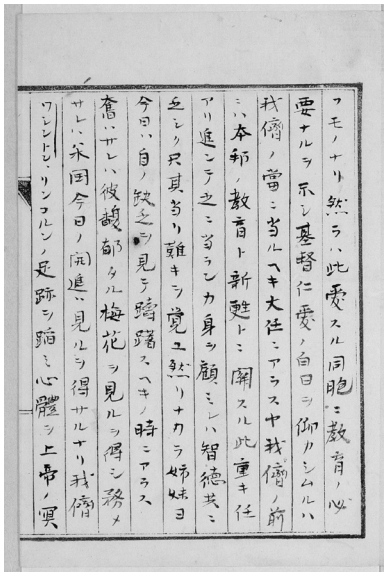
息子忠雄を夫の後継者として立派な「二世牧師」に育てたことも、日本キリスト教界における登茂の大きな貢献であった。因みに、原家は忠美・忠雄・忠和・牧人と和人と、四代に渡る牧師一家である。

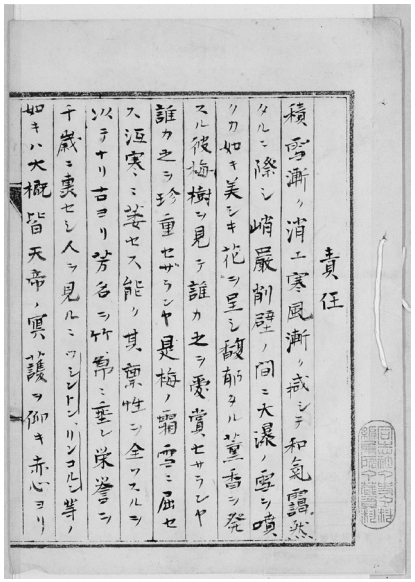
付Ⅰ・山岡家・原家関係系

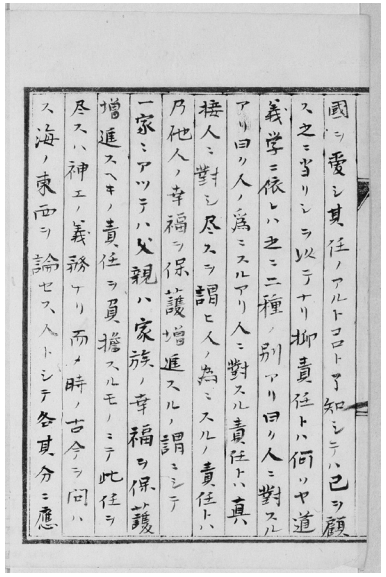
（上半部は、岸和田市立郷土資料館編『新島襄と山岡家の人々』六〇頁を参照して作成）

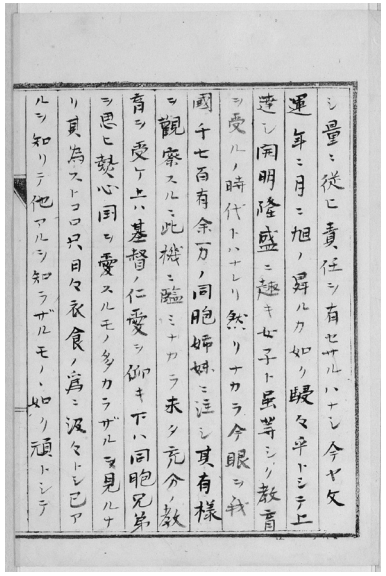


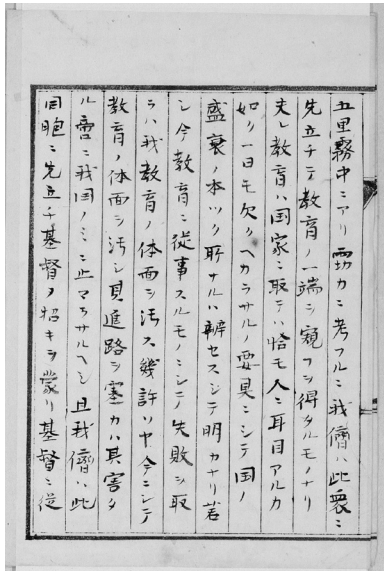












付Ⅱ・山岡ともが同志社女学校卒業時に書いたエッセー「責任」原稿
（新島遺品庫 上0148）